

## 詩同人誌評

### 第9回

# 人はなぜ詩を 書くのか

中塚 鞠子

ロシアのウクライナ侵攻がまだ続いているというのに、またイスラエルとハマスの戦争が始まった。人質を交換する間一時休戦という、まったく信じられない事がすすんでいる。パレスチナの難民は六〇〇万人という。さらに世界中で難民は一億人以上といわれる。届いていた同人誌は、約50冊。読み続けているともう満腹になった。なんと大勢の詩人たちが詩を書いていることか。何だかんだといいながら詩を書いているのは幸せだ。幸せなことに日本は憲法第九条のお陰で七十八年も戦争に参加していない国になっていた。実際に戦争に参加したり戦禍にあつた当事者はだんだん少なくなつてきている。ただ、情報も映像もテレビや、SNSなどを通して溢れている。どこまでか真実なのかどこまでがフェイクなのかわからない。

ただどちらがどうでも、崩れ去つた街、亡くなつた人、傷ついた人、は現実なのだ。

だが、当事者でないだけにこれを詩にするにはむずかしいことは確かである。

「詩人会議」8月号(719号)は「現代の戦争」の特集を組んでいる。豊かに育つた人々には読んだり観たりしたものでしか解らない。

河津聖恵「ウクライナの緑」(「詩人会議」)

ウクライナ 含羞う少女を想わせるその名に

胸をつかれたことがある

パウル・ツェランの一節

「タンポポよ ウクライナはこんなにも緑だ」

母の死を知つた後に書かれた詩だ

ユダヤの詩人はリビユから二百キロの町で生まれた

二十歳の時ナチスが故郷に侵攻し

父母を強制収容所で失う

最愛の母はうなじを撃たれた

(略)

詩は一人の深い悲しみが残す緘い声の道詩を生むほどの悲しみはあつてはならないのに

詩は悲しむ者のためになくてはならないと

いう矛盾

省略した部分に作者のかきたいところはあつたかもしれない。がいま、みんなが詩を書くこととして意味を考へるのによかつたので紹介させてもらった。

谷川俊太郎「事情と業」(「詩人会議」)

言語と映像でしか知らない事実を

とりあえず私たちは現実と考へるが

いつもどこかしらがつきまとう

ほんとのホントはどうなつてゐるの

ほんとのホントは何考へてるの

悪に正義が絡んでない?

正義にお金が絡んでない?

そう問いかけたいが

一体誰にどんな組織に問えばいいのか

大体答えを期待するのが無理だから

結局じぶんひとりです問自答

敵味方のミックスジュースを味わつて

等身大のゲップをしている

これは二連目、三連目。一連目は省略したが、相田みつをさんの「ロシア人ブーチンさんの個人事情は、日本人である私個人の事情とはずいぶんかけ離れているだろうが、私個

人と彼個人の抱える業のようなものは意外に似たところがあるかもしれない。だって人間だもの」というのがついているのである。「事情と業」とタイトルをつけたのにはそういう事情がある。事情も業も加味しない、等身大のげつぷをするとは、さすがに谷川俊太郎さんだと思う。しかし、部外者はげつぷで済むが、自分を守らないと死ぬ人たちもいる。

戦中派も戦前派も色々な形で詩を書く。

しかし、いまウクライナに出掛け、ガザに出掛け、生の戦争を実際に見たところで何かわかるだろうか。残酷と悲惨が見えるだけだ。

### 神次郎「人はなぜ戦争をするのか」(「詩人会

魏」)ーアインシュタインとフロイトの往復書簡を読んで、というエッセイが目にとまった。

一九三二年、国際連盟の依頼で「ひとなぜ戦争をするのか」を巡って議論が戦わされた。アインシュタインが相手に選んだのはフロイトであった。書簡が交わされた翌年ナチスが生まれた。二人ともユダヤの血を引いているため夫々、米英に亡命することになる。

アインシュタインは「人間の心自体に問題があるのだ。人間の心のなかに、平和への努力に抗う種々の力が働いているのだ。

第一に権力欲。いつの時代でも、国家の指

導的な地位にいるものたちは、自分たちの権限が制約されることに、強く反対します。(略)この権力欲にすり寄るグループがいるのです。戦争の折に武器を売り、大きな利益を得ようとする人たちが、その典型です」と、また「なぜ、少数の人たちがおびただしい国民を動かして、彼らを自分の欲望の道具にすることができなのか」と問いかける。

フロイトは、これを人間の「欲動」と定義付けた。そして「権力という言葉でなく暴力というむき出しで激しい言葉を使いたいと考えています。権利(法)と暴力、権利と暴力は密接に結びついているのです。権力(法)からはすぐに暴力が出てきて、暴力からはすぐに権利が出てくるのです」と答えている。

ハイテクの戦争になってきて、攻撃するものが痛みを知らないのだ。まさに第三次世界戦争になりかねない様相である。どこかの戦争でも今は、世界中が影響を受ける、グローバルな時代になっている。神氏はフロイトの言葉「文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩みだすことができる」をあげています。そうであって欲しいものです。

### 高石晴香「悪魔の育て方」(「石ノ森」198号)

声に出しては 言ってはいけない

「全てはあなたのために」

それは魔法の言葉であり

闇の呪文

耳障りよく

案外 すんなりと 心の奥に入りこむ

面とむかって言ってはいけない

「あなたのことを想って」

魔法にかかるのはほんの一瞬のこと

悪魔が とりつくのは その一瞬の隙間

さあ、これは面白い。どう理解しようと読み手の勝手。恋愛にも当てはまるし、友情にも当てはまる。戦争にだって当てはまる。自分自身が自己暗示にかかってしまう。

謎に満ちた詩を読むのは好きだ。引っかけ、はて？と考える。そんな詩が好きだ。

### 牛田丑之助「氷の町」(「PO」189号)

溶ける水は

暖かい

瀕死の僕は

意識の消える悦びに震えるが

祈りは浄化されない

祈りは気高いだけで

天国の門を開けない

君の手も屍の冷たさで

笑顔は強張り

だから僕はそのまま静かに

氷柱になる

そして君は僕の知らないバスに乗り

氷の都へと旅立つ

窓から手を振ってくれたように見えたが

つぎの瞬間に硝子に結晶になっていて

街に残った僕は

溶ける氷のように

冷たさを感じ

暖まっている

誰もそのことを教えてくれないが

そうであればいいなど

思っている

だが、この詩に関しては、解らない。情景が浮かばない。意識の消える悦びに震える、とは。心中を試みているのだろうか。雪の中に閉じ込められ、君だけ亡くなって、自分は救助され生き残ったのだろうか。(そうであればいいなど／思っている)とは、無念なのか。

野々ゆか「あつ」〔月の村壺番地〕14号)

あつ

ゾウの鼻が

短く

なりました

おどろいた母さんと

長く

話していたいから

これも、なかなか解釈しようとするれば難解だ。ゾウの鼻が短くなったことで、話題ができて、母さんと長く話ができる、とそのまま受け取ってもいいのかもしれないし、ちょっと言葉遊びができたと考えてもいいのかもしれない。野々さんは独特の感性の持ち主だ。「月の村壺番地」は人数も増え、多彩な詩を展開している。やはり同人誌はお互いに刺激し合う多彩なメンバーが必要だ。

上野真生「絶対音感の僕」〔Rosa 2 Kernel〕7号)

おはようございます

僕の今日の音程はファのシャープ

あつぎつ

先輩はシのフラット

そんな悪くないハーモニ

頑張ろう

鏡に向かって休憩時間

作った笑顔と外れたピッチは

ハーモニすら生まれぬ

たぐいま

僕は44〇Hz調整、ミのフラット

ちょっとメランコリック

おかえり

彼女は438Hz調整のレで返す

ちょっとチューニングが必要だ

これは、なかなか魅力的だ。感情を音で表すというのは難しいが、楽しい。読者には実際には、ファのシャープがどんな音か、440Hzがどのくらいの高さなのか、など解りはしない。が長調で明るい感じか短調で少し沈んだ感じとか、まあ想像するわけである。

立野淳子「ぎしき」〔黄薔薇〕221号)

この かんじょうの でどころを

たしかめたいのだ

いま の わたし の こころ の

ありどころを

めまいをおこしてかわる

わたし の ころ の うごき を  
ことばにかえたいのだ

(略)

ただ

たしかめたいのだ

わたしのなかの

ふるいきおくにつながら

されはしどうしを

つなげる さぎょう

おきざりにした

わすれてしまえないきおくたち

うずもれて

おもいだせないきおくたち

(略)

わたしがわたしで あるための

どうでもいいのかもしれない

わたしの ぎしき

平仮名だけで、しかもへいまのわたしのころのという書き方は、心が、記憶が、バラバラな感じをよく表していると思う。書くということが、自分にとってどんなに切実なことなのか、よく伝わってくる。

### 角朋美「陸上競技」(「潮流詩派」275号)

つま先を浮かせて輪に入る

微笑みさえ装えば  
私の顔は見えない

土を蹴って宙へ遊ぶ

砂の心地におぼれるまでが

私を保てる秒数

このひた走る魂に自由を

夏がすべての音を焼く

重力が私をつかまえる

言葉を削って、抽象的に書いている。陸上

競技は走り幅跳びなのだろうか。最初の輪に入る、という所で、うん？と、ちよつと引

かかるが。村野四郎の「体操詩集」を思い出した。もうひとつ短い詩を紹介する

### 佐野亜里亜「人形の時間」(「潮流詩派」275号)

声を封じ込め まぶたをふさげば

視界はもはや 私のものではない

駆けていく。

捕まる。

掴む。

透明な胸だけが秘密を握るから  
夏の窓が静かだなんて 知らなかった

こうして点のひとつひとつは  
瘦せた背骨に送られる

見えない喋れない状態、つまり、見えない喋

らない状態、に置く私は人形の時間になる。

駆けていき、捕まる。でも、何故掴むの

うか。掴むのは捕まえた人なのだろうか。

いろいろと想像ができるが難しい。

この「潮流詩派」275号は「麻生直子の世界」という特集を組んでいる。この会員制の詩誌

を六十八年も続けてきた麻生直子という人はすごいと思う。さまざまな詩人たちが、詩人論、作品論の形で彼女の世界を展開している。

珍しく文語体の詩があつたので紹介しよう

と思う。口語自由詩やアフォリズムなどの先端を走っていた萩原朔太郎が、突然詩集『水

鳥』を文語体で書いたことは有名である。まえがきに、詩的情熱の素朴純粋な詠嘆である

とある。芸術価値を求めたものではなく、自分の生活を吐露したものである、と。

文語体は、やはり詠嘆にはもってこい

うだ。

川本多紀夫「沼の花」(「RIVIERE」189号)

川本多紀夫「沼の花」(「RIVIERE」189号)

夜半の真黒き沼のみなにもに

淡白くうすら明かるみて

うつぶせる花 ひとつひらきそめ

悲しげに うなだるる

人の顔なせる

花ひとつ 咲きともり

瞳は切なく みづからを

見つめてみひらかれ

やつるるたましひ 憂ひうなだれ

たましひひとつ 咲きともる灯りは

墨色なせる沼のみなにもに

はつかに ゆらぎて映る

これは、オデイロン・ルドンの版画「沼の花」を観ての詩であるから、雰囲気を出すために文語体にしたのであろう。朔太郎の「月に吠える」など初期の作品のイメージを思い浮かべる。むしろ絵(版画)を出さなければよかつたのではないかと思う。

向川裕章「ひとりうた」(「笛」303号)

荒涼たる空染めいく群青は

懐郷の色 忘却の施し

果たせない 夢想閉じ込め  
迷い人となり

夕刻の稜線縁取る赤紅は

幽明の境 惜別の装い

過ぎ去りし 苦楽をまとい

流離いの人となり

(略)

少し漢文調を残した文語体ではあるが、多分書いている本人は、陶酔できているのではないかという気がする。

左子真由美「おとぎ話のように」(「イリヤ」

23号)

かつて一日だけ暮らしてもいいと

思った人があつた

一日じゅう野で働き、汗をかき

つましい食卓には

山路の煮物、芹のお浸しなどを載せて

夕べには菓を編むひとのそばで

機織りなどしながら

おとぎ話のように暮らす

それはたった一日のことだけれど

そこでは一日は一年のように

そして十年のように

あるいはちいさな一生のように過ぎるのだ  
った (略)

この詩は、(二人きりで会ったこともなく／恋したわけでもないのに／今はもう亡くなつたひとのことを／そんなふうに通うことがある／それはなんであつたらう…)と結ばれる。左子さんはいつも優しい詩を書く。こんな詩を書いてみたいなと、ときどき思う。

【受贈詩誌】

「アリゼ」215・216・217号・「ア・テンポ」63

号・「軸」148・149号・「異郷」63号・「石ノ森」

198号・「イリヤ」23号・「KALGA」123号・

「GAGA」87号・「交野々原」95号・「黄薔薇」

221号・「組香」8号・「雲」7号・「CROSS

ROAD」21・22号・「現代詩神戸」282号・「小

手鞠」25号・「詩人会議」719号・「多島海」43

号・「潮流詩派」274・275号・「月の村老番地」

14号・「天国飲屋」3・4号・「木偶」123号・

「飛脚」39・40・41・42号・「笛」303号・「プ

ライム」56号・「PO」189・190号・「ほとり」

70・71号・「三重詩人」262・263号・「水の呪

文」56号・「Messier」61号・「RIVIERE」

189・190号・「梨翠書」14・15号・「りんごの木」

64号・「歷程」616号・「Rosas+Kerne」7号